

# 龍門文庫蔵『中務内侍日記』鎌倉末期写本

## 翻刻

広島大学日本語史研究会

### 一、龍門文庫蔵『中務内侍日記』について

ここに翻刻する『中務内侍日記』は、奈良吉野の阪本龍門文庫に蔵される、鎌倉時代末期の写本である。

本書は、川瀬一馬「中務内侍日記の鎌倉鈔本(断簡)に就いて」

(「青山学院女子短期大学紀要」第八号、一九五八年十月)で書誌情報および川瀬氏蔵写真一葉が掲げられ、翻刻と共に学界に紹介された。その後、川瀬一馬編著『龍門文庫善本書目』(一九八二年、阪本龍門文庫)に、残巻初葉の写真が載せられた。

玉井幸助『中務内侍日記新注 増訂版』(一九六六年、大修館書店)・『新 日本古典文学大系 51 中世日記紀行集』(一九九〇年、岩波書店)などは、『中務内侍日記』現存最古の鎌倉時代末期写本を、右の川瀬氏翻刻に依って活用してきた。

そのような状況下、幸いなことに、二〇〇三年十二月、インタ

ーネット上の「阪本龍門文庫電子画像集」で、龍門文庫蔵本の鮮明な全頁カラー写真が公開された。岩佐美代子『校訂中務内侍日記全注釈』(二〇〇六年、笠間書院)は、この全頁カラー写真をも参照し、龍門文庫蔵断簡十三丁と川瀬氏旧蔵三丁とを併せて翻刻している。

広島大学日本語史研究会は、インターネット上のカラー写真に基づき、本書の輪読を進めてきた。その輪読の中で生じた疑問点を、龍門文庫御当局のお計らいで、原本によって確認することができた。原本閲覧調査には、佐々木勇・坂水貴司があたった。幸い、龍門文庫から翻刻の許可も頂けたため、龍門文庫蔵本の全文翻刻文をここに公にする次第である。

先行の翻刻を改めた部分も存する。大方のご批正を願いたい。

(以上、佐々木 勇 記)

### 二、翻刻

〔凡例〕

一、本翻刻は、龍門文庫『中務内侍日記』（龍門文庫二ノ一）原本に基づき、その全体を、現行の字体に改めたものである。仮名遣いは、原本のままとした。虫損・破損で読み得ない箇所は、□で示した。破損箇所を推読した場合は、その一文字直下に「推読」と記した。

なお、川瀬氏所蔵の三丁は、紙幅の都合上、写真が公開されている一面のみ写真に基づき翻刻した。

一、翻刻にあたり、原本丁数表裏とともに龍門文庫蔵本全行に通し番号を付した。また、丁数表裏「一才」などに続けて、参考のため、（一）内に『新日本古典文学大系S1』・『校訂中務内侍日記全注釈』の当該頁・行数を記した。（上段が新大系、下段が校訂全注釈の所在である。）

一、本文が欠けている箇所、（本文欠）の一行を入れた。  
なお、巻末12オ〜13ウは、一紙である。その間の（本文欠）は、綴葉装一綴り五紙の、中四紙十六丁が散逸したものである。

一、その他、必要と思われる注を、当該箇所に「」に入れて記した。

一、本翻字本文は、佐々木勇・小川真央・川北晋子・坂水貴司・植村志保・大野綾香・加藤ふみ・最所あきこ・菅近晋平・粒田真由美・服部芳野・西浦瑞姫で作成した。

一、原本閲覧ならびに翻刻の御許可を賜わった阪本龍門文庫に対し、心中心より御礼申しあげる。

〔翻刻〕

「一才」(253頁16行・134頁3行)

1 しかるらんとおほゆれとそれにつけても

2 ふりにしむかしは思出らるゝをわすれし

3 といひしその世のともはなきもあるに

4 こそひきかへたる雲のうへ草のかけにや

5 思やるらんかゝるなきけのつゐてにはわす

6 れぬふしおほくしのはれんとやい、

7 をきつらんなどいふにふねにのらんとて

8 いけのみきわなる花の下に月のかほ

9 のみまほられてしはしあるに大納言殿

10 あはれにこの世ならでも思出つらんやとて

11 あれば

「一ウ」(254頁6行・134頁8行)

12 月にとい花にかたりてしのふるを

13 またあわれなる人もありけり

14 つとめて大納言殿

15 としをへてけふをかならず契こし

16 人しもなとかとまらざるらん

17 御返し

18 春をへてかはらぬはなの色なれば

19 さこそみし世のともとこふらめ

〔こふ〕は「なる」見せ消ち、右傍墨書

20 いつとてもあはれはたえてありながら

21 わするなといひしけふそかなしき

22 三月廿六日雲井の花みなちりはて

(本文欠)

〔川瀬氏蔵本〕(255頁13行・138頁8行)

九日は小正月の御幸なり

五月十五日御はいの御ともにせいりやう殿

のすのこにさふらへは花はあとなくて

木くらぎあをはの木すゑももしろし

六月二日女御まいり五日ろけんなり

御つかひに一条中将さねつくくれないの

うすやうの御ふみあさかれぬよりまい

らせて女御の御かたのたいはんところより

ろくたまえる六月六日御とのあふらまいらせて

のちつねの御所の御ゑんを新宰相殿

ととほるにむしのなきそむるをきゝて新

〔2才〕(256頁3行・141頁5行)

23 宰相殿

24 なきそむる虫のこえをしき、つれば

25 とてしものくもなければ

26 すてに秋なる心ちこそすれとつけ

27 たるを新宰相殿、心ちさへするとい、

28 たきとなんせさせ給ふいか、をなしき

29 七日人のもとより女御まいりのめてたき

30 仁治のれるのまゝに雨さへたかはぬも

31 めてたくて

32 いにしへをいまにつたふる雲のうへは

33 雨さへふるきためしをそしる

〔2ウ〕(256頁12行・142頁3行)

34 返事に

35 そのまゝをつたふる雲のうへなれば

36 雨さへそけに時をたかへぬ

37 六月十六日月さしいて、空は村雲たち

38 てはれくもりするしも心ありかほなる

39 に花山院中納言御ともにてせいりやう

- 40 てんにいてさせ給て月御らんせらる  
 41 皇后宮權大夫まいり給てふねにのり  
 42 侍らんと申給ふ程にしも大所の物  
 43 ともめしいて、ふねにのせらるとう院の  
 44 宰相中将もまいりてやかて御ふねに  
 「3才」(257頁1行・144頁5行)  
 45 まいりて藏人左衛門のりなをひちりき  
 46 權大夫しやうのふえ花山院よこふえい  
 47 とおもしろし  
 48 同廿七日親王のせんしなりその日とき  
 49 わゐとの、いつみ殿へ御わたましに女房  
 50 たち御まいりともありいと「補入御」人すくなに  
 51 てのとやかなるに御はいの御てうつもちて  
 52 まいりてみいたしたるに女御のたてしとみ  
 53 にあをやかに藤のしけりたるをこと  
 54 しは花さかてすきぬると申せはこの  
 55 程さきたるをいまたみすやうたてと  
 「3ウ」(257頁6行・145頁2行)  
 56 おほせことあれはさも侍らすと申せは

- 57 さてそれはこなたよりみえさりけり  
 58 いつふさはかりさきたりきいつものころ  
 59 にはあらてことし、もおりしりてさき  
 60 ける花の心もありかたし  
 61 おりしりてかくさきあえる藤の花  
 62 なをなへてには思へきかな  
 63 れいのまゝならはいまはさかりもすきまし  
 64 七月七日院の御所より露の御さうし  
 65 とてめんくゝにたまえりて哥よみ侍に  
 66 權大納言のすけ殿にたつねまいらす  
 「4才」(257頁13行・147頁3行)  
 67 れは御しもとてあり御局をひきあげ  
 68 たれは「推説」この御さうしかけは北山との、  
 69 けふ戀しく思いたされてとて  
 70 たきもの、ふけしけふりのすゑにても  
 「に」は「ま」を「に」に訂し、右傍墨書  
 71 よとせの秋はあわれなりしを  
 「は」は「を」を見せ消ち、右傍墨書  
 72 とやかてかへらせたまへは思いての戀しき  
 73 もかくなれはいと、色そいて  
 74 けにやけにいつもほしあひの空なれと

- 75 よとせの秋はあはれなりしを  
 76 まちえたるけふもけふこそうれしけれ  
 77 たなはたつめやけふもけふなる  
 「4ウ」(258頁3行・147頁9行)  
 78 くれぬれはきかうてんの火の光  
 79 水にうつろひてけしきことにをも  
 80 しろしことちたてよとう院の宰相  
 81 中将也くわみのしるしもめつらしとや  
 82 たなはたつめも思やられて  
 83 たむけをくたまのをこともこの秋は  
 84 たなはたつめのいかにきくらん  
 85 この秋は七夕つめにたむけをく  
 86 たまのをことよねもやそふらん  
 87 たむ「推証」けするそらたきものにいかはかり  
 88 あまのはころも袖かほるらん  
 「5才」(258頁8行・148頁4行)  
 89 権大納言殿まいらせ給て御かたりあり御所  
 90 大納言とのひわことは女御の御かたの  
 91 権大納言殿とう院の宰相中將ふゑ花山

- 92 院中納言殿はくの少将やすなかひやうし  
 93 あやの少路の少将御かくはてぬ心の中  
 94 しつまりはて、月みむといゝて女御  
 95 の御かたにしのひて御ひわひかせ給  
 96 十月十九日くわんのちやうの行幸なる  
 97 廿一日御けいの行幸出御の内侍少将  
 98 少輔内侍なり女公所(女御)の内侍馬にはのる  
 99 へしとてこうたうとこれと命婦四人  
 「5ウ」(258頁14行・151頁3行)  
 100 は、木あわち備せんひせん蔵人  
 101 にみあれのすむつる御みやうれうにて  
 102 いてたつうらこきそはうの三衣□「某字を重書」あをき  
 103 ひとへかうけちのもこきはかまむらさき  
 104 のさしぬきのも、たちよりつまをい  
 105 たしてくわんのくつとてはきてかみ  
 106 あけて馬にのりてくふすかり屋に  
 107 まんをひきて女御代の御車たてられ「れは」に重書  
 108 たりいたし車色くくみえてひんてう  
 109 さうし車のまへにたつそらたき物、(2)

- 110 にほひ心にくくゆりみちてなん  
 「6才」(259頁3行・151頁8行)  
 111 閑院とのゝあとに御さしき七けんなか  
 112 のまは院の御かた左は皇后宮の御かた  
 113 なりもみちかさねのをしいたしみゆ  
 114 御所のにしにひらいたしきにむらさき  
 115 へりし「補入き」てさうし二人ていしたり御は  
 116 しのまにさいをん寺の大納言とのつかせ  
 117 たまふ右のかたのかりやに殿上人とも  
 118 ちやくさしたりそのしもに北おもて  
 119 御すい身いたりきくもみちうゑて  
 120 御さしきのきしきいひつくすへくもな  
 121 しすきぬれは道よりおりてくるま  
 「6ウ」(259頁7行・151頁11行)  
 122 にてしとみやにまいるいしたてまつ  
 123 うへたり主上ようよにめしてはらへ  
 124 とのへなるくわん御なりてのち十三日  
 125 そのたひにそのおりつくく久し  
 126 からんをりなどあり御わきまへはその

- 127 おりにてあり十一月は大しやうゑとて  
 128 しも月八日女公所はしめとていうきしゆ  
 129 きにてつくるかいまたいてこねはいうき  
 130 には神きくわんをもちあらるとかや  
 131 しゆきには御みやうれう也八日月さし  
 132 いつるほとにこうたうと一車にて行  
 「7才」(259頁12行・154頁4行)  
 133 夕つく夜のさひしき影うちのはるくくと  
 134 しもかれの野へにさはる物なくみえ  
 135 たるもなかくおかしきに  
 136 しもかれの野へにしあれははるくと  
 137 ところえかほに月のみそすむ  
 138 さて月入てのちかへる女公所にかねて  
 139 十二日とてありしかとおそくつくり  
 140 いたすに十七日より入に雪うちりて  
 141 冬こもりたる空のけしきのすこき  
 142 に御やうれうのなかなるにやしろ  
 143 のみそひとつみいたしたるこうたうは  
 「7ウ」(260頁2行・155頁3行)

144 神きくわんのつかさの東に女公所の  
 145 やたてたるに侍これには御やうれうのうち  
 146 にいぬゐのすみなりとくせんを  
 147 とらぬおとゝい女官にはつかさとて代く  
 148 のくわんと名のりてれいともひききや  
 149 うしくわんにもあいしらいけなりく  
 150 わんかたのきやうしくわんのたゝみせ  
 151 めいたしてしくさとよりひやう風  
 152 さをつしやうのてうとゝもめしよせて  
 153 しつらひいるさる程に日くれぬさとより  
 154 人まいりてつしたてさをつらせなとす  
 「8才」(260頁9行・155頁8行)  
 155 思もよらぬほどに御幸ありときくこう  
 156 たうの所よりこれへいらせをはします  
 157 はれかましくなる女房たちいくらもく  
 158 をし入ていかにくゝなどおほせらるゝ  
 159 さをなるはかまひきおとしてきつや  
 160 かけていらせをはしまして衣のかけやう  
 161 思所ありけにこそかけたれとおほせ

162 ことありてしつらひやさしなときよかん  
 163 にあつかるこよひおとなしき人まひらすは  
 164 いかにくゝはちかましからましとおほゆ木  
 165 丁などもたてめくらしつよくゝ御らん  
 「8才」(260頁13行・155頁12行)  
 166 ありて還御なりぬめんほくもはち  
 167 かましさもおとるかたなくこそ覚侍れ  
 168 さてよもあけぬれはくわんよりきやう  
 169 しくわんとていりさふらはんことう  
 170 けたまはらんと申大しやうゑのいな  
 171 のみのをきないんこや女とかや色くゝの  
 172 ものゝしやうそくの衣色くゝのそめく  
 173 さ花くれなゐなとまいらせたりかたの  
 174 ことくなれは女官このちやうにては道  
 175 行かたきしたいともふ行の弁なか  
 176 かぬにふれ申せはくにくゝへは下地し  
 「9才」(261頁2行・156頁2行)  
 177 侍ともいまたさたせすせめふせ侍らん  
 178 など申きやうしくわんと女官といさ

179 かうおそろしなからをかし十八日には行  
 180 幸なる十九日權大納言御局へくるゝ程に  
 181 昨日よりちかきたのみはなくさむに  
 182 おほつかなくてけふもくれぬる  
 183 と申せは御返事  
 184 いましかくかきかよはせはなさけこそ  
 185 あひにあひぬるちかきしるしよ  
 186 いまは心つよくおほゆるにつけて  
 187 つれくはみる心ちせよこゝにいま  
 「9ウ」(261頁9行・159頁7行)  
 188 おほうち山のくれのけしきを  
 189 廿一日はまいりの夜ちやうたいの出御に  
 190 御つまいたしてなる女房たち御しりに  
 191 つけてまいる女公所はてぬほとはほかに夜  
 192 をこさぬことにてあからさまにまいりてかぬ  
 193 うたぬさきに女公所へかへる つきの日新宰相  
 194 とのゝもとよりことのまきれなるにかく  
 195 人しれすやさしくそみし月影も  
 196 おほ宮人の袖のけしきも

197 よそにみんなのとはかねてしらさりき  
 198 とよのあかりの在明の月  
 「10オ」(261頁15行・160頁1行)  
 199 よもすからおほうち山の月かけに  
 200 たちまふ袖と思こそやれ  
 201 せめてたゝもしや心のなくさむと  
 202 はこやの山の月をこそみれ  
 203 をのつからなれし名こりをわすれすは  
 204 みせはやともや思出らん 返しか  
 205 ありしにもあらずや人のうらむらん  
 206 思なからに日かすへぬれは  
 207 よそにみてさこそ昨日はおもひけめ  
 208 おほ宮人の袖のけしきを  
 209 まきれつゝわするらんとやおもふらん  
 「10ウ」(262頁5行・160頁7行)  
 210 心の中にとはぬ日はなし  
 211 あわれにも心よはくそなかめける  
 212 とよのあかりのありあけの月  
 213 さこそけにとよのあかりのもろ人の

- 214 たちまふ袖も思やりけめ  
 215 さる程に行事くわん色くゝのそめ  
 216 草まいらせたれは女官つかさにうけとらす  
 217 しるしふみにまかせて御ちやうのかたひら  
 218 いなのみのをきないんこや女のしやう  
 219 そくの衣うけとらすにそめくさとも  
 220 りやう状のこくしのもとへつみつか  
 「11才」(262頁10行・163頁4行)  
 221 わすまた奉行の弁なかゝぬとさ  
 222 まのもよをしもしきりか「被掛けて御け  
 223 うそつかはず 行事くわんちきに う  
 224 けとらせ給へとていてきたれ「り」に重書はさふら  
 225 いともをいたして あいしらわするに 心えぬ  
 226 ことゝもあれは女公所のねうはうをは  
 227 しにいたしてみすのきわにかのき  
 228 やうしくわんをめしよせてきぬのす  
 229 むほうなどこまかにあいしらはせたれは  
 230 心えてよろこふといへとも そめくさの色くゝ  
 231 みえずして御所の御りきしやを申て

- 「11ウ」(262頁15行・163頁7行)  
 232 ところくゝへつけてかたのことくせめ  
 233 いたしつ 衣をとりかさねて花の色くゝ  
 234 くれないの色くゝをひとつによせててう  
 235 せさせてのちにその色くゝしなくゝにわ  
 236 かちぬはせて程なくさたしいてたれは  
 237 行事の弁よりはしめて悦いまた世  
 238 の中に行事くわんならひにふ行  
 239 の弁めんくゝに しやうそくうけとらす  
 240 そのきひきひつきぬしくゝ女公所にいてき  
 241 てしやうそくもあり いなのみのをきな  
 242 とてひんしろくひけはおひのもと  
 (本文欠)  
 「12才」(265頁3行・170頁8行)  
 243 たるさねたかの二位のこゑの色む  
 244 かしゆかしくおほゆときくきへ返て  
 245 としのしるしと かすかなるをりにも  
 246 けんしやうの御はちおとにまきれて  
 247 おもしろくやさしくきこゆやうくゝ

248 御かくらもはつれは空もあけぬ 神き  
 249 くわんもことにちかければなうしうし  
 250 たまふらんとおほえて心のうちに  
 251 君か代を千世のはしめといのるかな  
 252 神のつかさのちかきたよりに  
 253 御神楽はてぬれは人くろく給りて出ぬ  
 [12ウ] (265頁8行・170頁13行)  
 254 をみのすかたあくる日影にかゝやきて  
 255 やさしくみゆ  
 256 山あひの色やこほりにみたるらん  
 257 日影うつろふをみのころもて  
 258 そのち御せんめしあした所のみ  
 259 なみおもてのひろひさしに殿上人  
 260 まいりて「<sup>補入</sup>まいのゝしる物、まねなどするにのなにをもよ  
 くさうするいまゝいり」めしいたしたれば馬をよくさ  
 261 うしてこの御むまはかさおとろきやし  
 262 侍らんと申せはいしくさうしたりとて  
 263 しよう人わか身さうせよといふにかみは  
 264 なにこともめてたくわたらせ給候に

(本文欠)  
 [13才] (270頁6行・190頁6行)  
 265 時しも人にとわれぬ□□□「破損」  
 266 正應五の二月までつほねにさふらへは  
 267 いやくやまひおもくてさとに出たるに  
 268 三月つこもりにちりたる花にかきつけ  
 269 て新宰相殿  
 270 ちる花の名こりのみこそなけかるれ  
 271 又こん春もしらぬ我身に  
 272 返し  
 273 ことしはた花ふく風もいとはれす  
 274 た、我身をもさそへと思に  
 [13ウ] (270頁12行・191頁1行)  
 275 伏見院中務内侍  
 276 従三位藤原永經卿女  
 277 自坊御時祇候  
 278 自弘安三年記之

(代表 佐々木 勇・広島大学・教授)